二次林とトリ[1)]

山　岸　　哲[2)]

演者は信州大学の羽田健三氏を中心とする「長野県に生息する鳥類の5ケ年間の調査」に加わった。その結果の一部を報告書とは別のまとめ方をして，天然林との比較という形で二次林の鳥の特性について発表した。調査方法及び調査地については既に長野県より1977年に出版されている「長野県の野鳥（pp. 182)」を参照されたいが，以下で論ずる数値は繁殖期に調査した一般には繁殖個体数と考えられるものである。

調査した林の中から天然林として9種類，二次林として3種類，合計12種類の林を選んで比較した（図1)。その林が天然林か二次林かの判断は「長野県の植生（宮脇昭監修1971)」によった。これらの12種類の林に出現した鳥類は28科74種であった。各林の出現種及びその密度は図1に示す通りである。発表の要点は以下の如くであった。

①カシ林は長野県下では南部に貧弱な林がわずかに分布するのみで，本当にカシ林の鳥の特徴や密度をつかめているかどうか疑問である。

②ほとんど全ての林（カシ林は除く）にヒガラが出現した。

③天然林の鳥は種構成の類似性から概観して4分された。

A）シラビソ・コメツガ・オオシラビソ・ダケカンバ林の鳥

B）ブナ・ウラジロモミ・ミズナラ林の鳥

C）カシ林の鳥

D）カラマツ林の鳥

この区分は針葉・広葉樹のちがいというより，むしろ標高とか水平分布帯によっているように見える。即ちA）はコケモモートウヒクラス域に，B)はミズナラ－ブナクラス域に，C)はヤブツバキクラス域に(ただしD）は今のところ位置づかない）対応をしているように見える。

④天然林の4つのタイプを代表する鳥はそれぞれ次の各種であった。

A）キクイタダキ（ただしダケカンバ林ではそれほど卓越しない）

B）コガラ・シジュウカラ

C）メジロ・ヤブサメ

D）ウグイス

⑤二次林の鳥は3つの林とも類似した種類構成を示し，天然林のタイプではB）に似かよっていた。その理由は二次林はB）の植生クラス域が切られたものが多いからではあるまいか。

⑥二次林になったために消えてしまったという種は今回の調査では見られていない。

⑦二次林の鳥の特徴は出現種類数が多く（この傾向は植栽の二次林でも再生の二次林でも見られた)，どの種の密度も一般的には下って，林の鳥の数が全体的に少なくなり，卓越して出現する特別の種が見られなくなることである。しかし，天然林ならどの林も密度合計が高いわけではない。

⑧この調査には幾多の問題点が含まれる。調査した二次林の切られてからの年数，広さ等が調査結果に大きな影響を及ぼしている。また，その林を鳥が実際の生活上でどのように使っているのかについてはこのようなセンサスワークでは明らかにすることはできない。

1）関西自然保護機構業積第12号

2）大阪市立大学理学部生物学教室

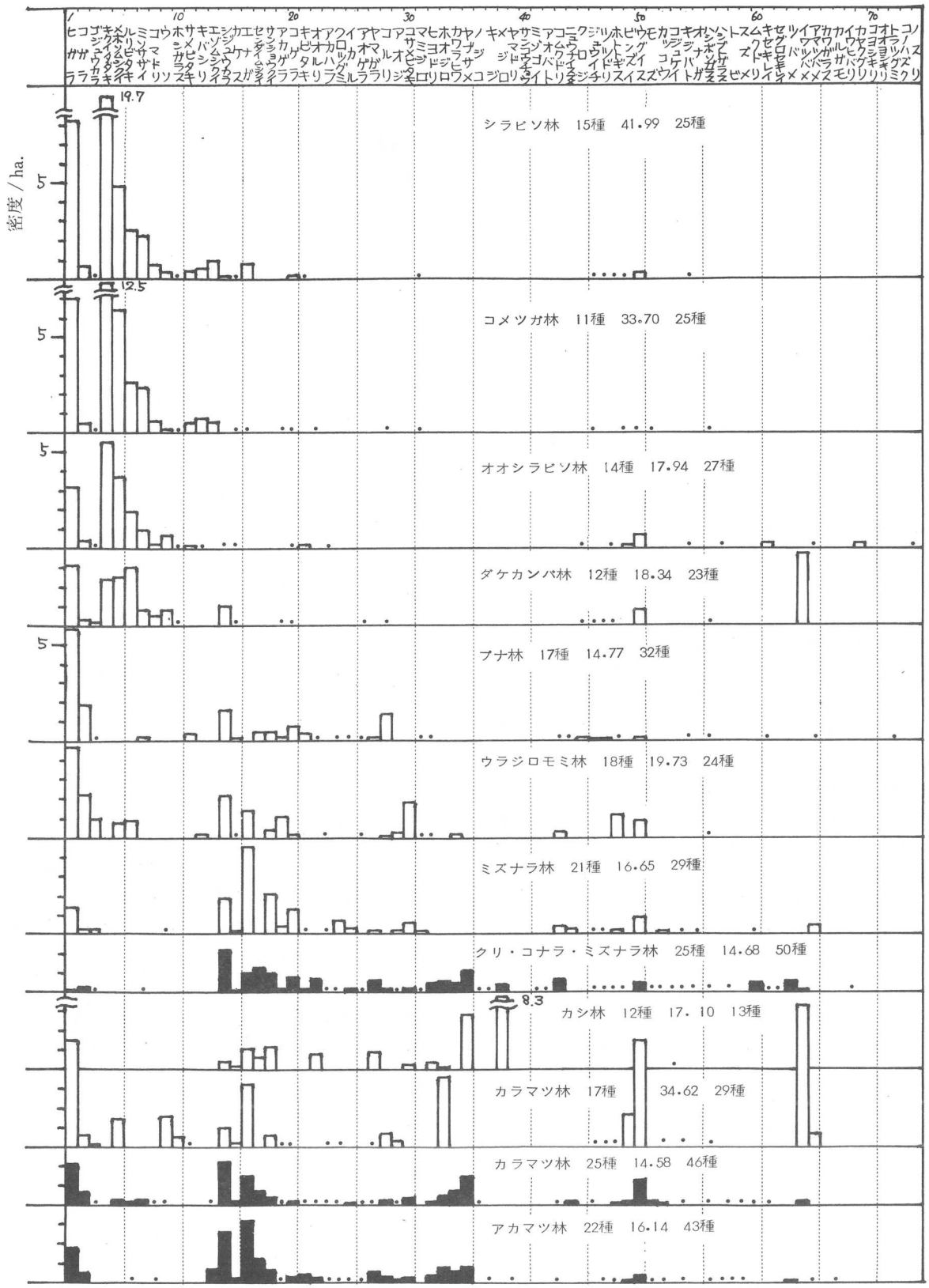


図1　各林の出現種と密度

（林名の次に，0.1/ha以上の密度を有する種類数，密度総計，総出現種類数の順に示す．●印は0.1/ha以下の密度を示す）．